

銀河鉄道の夜

宮沢賢治

銀河鉄道の夜

宮
沢
賢
治

目次

一	午 ^ご 后 ^ご の授業	5
二	活版所	8
三	家	9
四	ケンタウル祭の夜	12
五	天 ^{てん} 氣 ^き 輪 ^{りん} の柱	17
六	銀河ステーション	20
七	北十字とプリオシン海岸	23
八	鳥 ^と を捕 ^と る人	30
九	ジヨバンニの切 ^き 符 ^ふ	36

午後の授業

「ではみなさんは、そういうふう川だと云われたり、乳の流れたとだと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」先生は、黒板に吊した大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のようなところを指しながら、みんなに問をかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四五人手をあげました。ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないという気持ちをするのでした。

ところが先生は早くもそれを見附けたのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかつているのでしょう。」

ジョバンニは勢よく立ちあがりましたが、立つて見るともうはつきりとそれを答えることができないのでした。ザネリが前の席からふりかえって、ジョバンニを見てくすつとわらいました。ジョバンニはもうどぎまぎしてまっ赤になってしまいました。先生がまた云いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよく調べると銀河は大体何でしょう。」

やっぱり星だとジョバンニは思いましたがこんどもすぐに答えることができませんでした。

先生はしばらく困ったようすでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けて、

「ではカムパネルラさん。」と名指しました。するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもじもじ立ち上ったままやはり答えができませんでした。

先生は意外なようにしばらくじっとカムパネルラを見ていましたが、急いで「では。よし。」と云いながら、自分で星図を指しました。

「このぼんやりと白い銀河を大きないい望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジヨバンニさんそうでしょう。」

ジヨバンニはまっ赤になつてうなずきました。けれどもいつかジヨバンニの眼のなかには涙がいはいになりました。そうだ僕は知っていたのだ、勿論カムパネルラも知っている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといつしよに読んだ雑誌のなかにあったのだ。それどこでなくカムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書齋から巨きな本をもつてきて、ぎんがというところをひろげ、まっ黒な頁いっぱいに白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れる筈もなかったのに、すぐに返事をしなかったのは、このごろぼくが、朝にも午后にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなとはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云わないようになったので、カムパネルラがそれを知って気の毒がつてわざと返事をしなかったのだ、そう考えるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのです。

先生はまた云いました。

「ですからもしもこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその

川のその砂や砂利の粒にもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考えるならもつと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでいる脂油の球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと云いますと、それは真空という光をある速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮んでゐるのです。つまりは私どもも天の川の水のなかに棲んでゐるわけです。そしてその天の川の水のなから四方を見ると、ちようど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集つて見えしたがって白くぼんやり見えるのです。この模型をごらん下さい。」

先生は中にたくさん光る砂のつぶの入った大きな両面の凸レンズを指しました。

「天の川の形はちようどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私どもの太陽がこのほぼ中ごろにあつて地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立つてこのレンズの中を見まわすとしてごらん下さい。こつちの方はレンズが薄いのでわずかの光る粒即ち星しか見えないのでしよう。こつちやこつちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるというこれがつまり今日の銀河の説なのです。そんならこのレンズの大きさがどれ位あるかまたその中のさまざまの星についてはもう時間ですからこの次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へでてよくそらをごらん下さい。ではここまでです。本やノートをおしまい下さい。」

そして教室中はしばらく机の蓋をあけたりしめたり本を重ねたりする音がいつぱいでしたがまもなくみんなはきちんと立つて礼をすると教室を出ました。

活版所

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人は家へ帰らずカムパネルラをまん中にして校庭の隅の桜の木のところが集まっていました。それはこんやの星祭に青いあかりをこしらえて川へ流す烏瓜を取りに行く相談らしかったのです。

けれどもジョバンニは手を大きく振ってどしどし学校の門を出て来ました。すると町の家々ではこんやの銀河の祭りにいちいの葉の玉をつるしたりひのきの枝にあかりをつけたりいろいろ仕度をしていたのでした。

家へは帰らずジョバンニが町を三つ曲つてある大きな活版処にはいつてすぐ入口の計算台に居ただぶだぶの白いシャツを着た人におじぎをしてジョバンニは靴をぬいで上りますと、突き当りの大きな扉をあけました。中にはまだ昼なのに電燈がついてたくさんさんの輪転器がばたりばたりとまわり、きれで頭をしぼったりラムプシェードをかけたりした人たちが、何か歌うように読んだり数えたりしながらたくさん働いて居りました。

ジョバンニはすぐ入口から三番目の高い卓子に座った人の所へ行っておじぎをしました。その人はしばらく棚をさがしてから、

「これだけ拾って行けるかね。」と云いながら、一枚の紙切れを渡しました。ジョバンニはその人の卓子の足もとから一つの小さな平たい函をとりだして向うの電燈のたくさんついた、たてかけてある壁

の隅の所へしゃがみ込むと小さなピンセットでまるで粟粒ぐらいの活字を次から次と拾いはじめました。青い胸あてをした人がジョバンニのうしろを通りながら、
「よう、虫めがね君、お早う。」と云いますと、近くの四五人の人たちが声もたてずこっちも向かずに冷くわらいました。

ジョバンニは何べんも眼を拭いながら活字をだんだんひろいました。

六時がうつてしばらくたつたころ、ジョバンニは拾った活字をいっぱいに入れた平たい箱をもういちど手にもった紙きれと引き合せてから、さっきの卓子の人へ持って来ました。その人は黙ってそれを受け取って微かにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをすると扉をあけてさっきの計算台のところに来ました。するとさっきの白服を着た人がやつぱりだまって小さな銀貨を一つジョバンニに渡しました。ジョバンニは俄かに顔いろがよくなつて威勢よくおじぎをすると台の下に置いた鞆をもつておもてへ飛びだしました。それから元氣よく口笛を吹きながらパン屋へ寄つてパンの塊を一つと角砂糖を一袋買いますと一目散に走りだしました。

家

ジョバンニが勢よく帰つて来たのは、ある裏町の小さな家でした。その三つならんだ入口の一番左側には空箱に紫いろのケールやアスパラガスが植えてあつて小さな二つの窓には日覆いが下りたまま

なっていました。

「お母さん。いま帰ったよ。工合悪くなかったの。」ジョバンニは靴をぬぎながら云いました。

「ああ、ジョバンニ、お仕事がひどかったろう。今日は涼しくてね。わたしはずうっと工合がいいよ。」

ジョバンニは玄関を上って行きますとジョバンニのお母さんがすぐ入口の室に白い巾を被って寝んでいたのです。ジョバンニは窓をあけました。

「お母さん。今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思って。」

「ああ、お前さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから。」

「お母さん。姉さんはいつ帰ったの。」

「ああ三時ころ帰ったよ。みんなそこらをしてくれてね。」

「お母さんの牛乳は来ていないんだろうか。」

「来なかったろうかねえ。」

「ぼく行つてとつて来よう。」

「あああたしはゆっくりでいいんだからお前さきにおあがり、姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行つたよ。」

「ではぼくたべよう。」

ジョバンニは窓のところからトマトの皿をとってパンといっしよにしばらくむしゃむしゃたべました。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつと間もなく帰ってくると思うよ。」

「あああたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの。」

「だって今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかったと書いてあったよ。」

「ああだけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれない。」

「きつと出ているよ。お父さんが監獄へ入るようなそんな悪いことをした筈がないんだ。この前お父さんが持ってきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのとなかいの角だの今だってみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかわるがわるの教室へ持っていくよ。一昨年修学旅行で　「お父さんはこの次はおまえにラッコの上着をもつてくるといったねえ。」

「みんながぼくにあうとそれを云うよ。ひやかすように云うんだ。」

「おまえに悪口を云うの。」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して云わない。カムパネルラはみんながそんなことを云うときは気の毒そうにしているよ。」

「あの人はうちのお父さんとはちようどおまえたちのように小さいときからの友達だったそうだよ。」

「ああだからお父さんはぼくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行ったよ。あのころはよかったなあ。ぼくは学校から帰る途中たびたびカムパネルラのうちに寄った。カムパネルラのうちにはアルコールランプで走る汽車があったんだ。レールを七つ組み合わせると円くなってそれに電柱や信号標もついていて信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くなるようになっていたんだ。いつかアルコールがなくなったとき石油をつかったら、罐がすっかり煤けたよ。」

「そうかねえ。」

「いまま毎朝新聞をまわしに行くよ。けれどもいつでも家中まだしいんとしているからな。」

「早いからねえ。」

「ザウルという犬がいるよ。しつぽがまるで箒ほうきのようだ。ぼくが行くと鼻を鳴らしてついてくるよ。ずうっと町の角までついてくる。もつとついてくることもあるよ。今夜はみんなで烏瓜からすうりのあかりを川へながしに行くんだって。きつと犬もついて行くよ。」

「そうだ。今晩は銀河のお祭だねえ。」

「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ。」

「ああ行っておいで。川へははいらないでね。」

「ああぼく岸から見ただけなんだ。一時間で行ってくるよ。」

「もつと遊んでおいで。カムパネルラさんと一緒いっしょなら心配はないから。」

「ああきつと一緒にだよ。お母さん、窓をしめて置こうか。」

「ああ、どうか。もう涼しいからね」

「ジョバンニは立って窓をしめお皿やパンの袋を片附かたづけると勢よく靴をはいて「では一時間半で帰ってくるよ。」と云いながら暗い戸口を出ました。」

ケンタウル祭の夜

ジョバンニは、口笛を吹いているようなさびしい口付きで、檜ひのきのまっ黒にならんだ町の坂を下りて来たのでした。

坂の下に大きな一つの街燈が、青白く立派に光って立っていました。ジョバンニが、どんどん電燈の方へ下りて行きますと、いままでだけもののように、長くぼんやり、うしろへ引いていたジョバンニの影^{かげ}ぼうしは、だんだん濃^こく黒くはつきりなって、足をあげたり手を振^ふったり、ジョバンニの横の方へまわって来るのでした。

（ぼくは立派な機関車だ。ここは勾配^{こうばい}だから速いぞ。ぼくはいまその電燈を通り越^こす。そうら、こんどはぼくの影法師はコムパスだ。あんなにくるつとまわって、前の方へ来た。）

とジョバンニが思いながら、大股^{おおもた}にその街燈の下を通り過ぎたとき、いきなりひるまのザネリが、新しいえりの尖^{とが}ったシャツを着て電燈の向う側の暗い小路^{こうじ}から出て来て、ひらつとジョバンニとすれちがいました。

「ザネリ、烏瓜^{うか}ながしに行くの。」ジョバンニがまだそう云ってしまわないうちに、

「ジョバンニ、お父さんから、らつこの上着が来るよ。」その子が投げつけるようにうしろから叫^{さけ}びました。

ジョバンニは、ばつと胸がつめたくなり、そこら中きいんと鳴るように思いました。

「何だい。ザネリ。」とジョバンニは高く叫び返しましたがもうザネリは向うのひばの植った家の中へはいってしまいました。

「ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのだろう。走るときはまるで鼠^{ねずみ}のようなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのはザネリがばかなからだ。」

ジョバンニは、せわしくいろいろのことを考えながら、さまざまの灯^{あかり}や木の枝^{えだ}で、すっかりきれい

に飾^{かざ}られた街を通って行きました。時計屋の店には明るくネオン燈がついて、一秒ごとに石でこさえたふくろうの赤い眼^めが、くるつくるとうごいたり、いろいろな宝石が海のような色をした厚い硝子^{ガラス}の盤^{ばん}に載^のって星のようにゆっくり循^{めぐ}ったり、また向う側から、銅の人馬がゆっくりこちへまわって来たりするのです。そのまん中に円い黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾ってありました。

ジョバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。

それはひる学校で見たあの図よりはずうっと小さかったのですがその日と時間に合せて盤をまわすと、そのとき出ているそらがそのまま楕円^{だえんけい}形のなかにめぐってあらわれるようになって居^ゐりやはりそのまん中には上から下へかけて銀河がぼうとけむったような帯になってその下の方ではかすかに爆発^{ばくはつ}して湯気でもあげているように見えるのです。またそのうしろには三本の脚^{あし}のついた小さな望遠鏡が黄いろに光って立っていました。いちばんうしろの壁^{かべ}には空じゅうの星座をふしぎな獣^{けもの}や蛇^{へび}や魚や瓶^{びん}の形に書いた大きな図がかかっていました。ほんとうにこんなような蝸^{さそり}だの勇士だのそらにぎっしり居るだろうか、ああぼくはその中をどこまでも歩いて見たいと思ったりしてしばらくぼんやり立って居ました。

それから俄^{にわ}かにお母さんの牛乳のことを思いだしてジョバンニはその店をはなれました。そしてきゆうくつな上着の肩^{かた}を気にしながらそれでもわざと胸を張って大きく手を振って町を通って行きました。

空気は澄^すみきって、まるで水のように通りや店の中を流れましたし、街燈はみなまっ青なのみや檜^{たの}の枝で包まれ、電気会社の前の六本のプラタナスの木などは、中に沢山^{たくさん}の豆電燈がついて、ほんとう

にそこらは人魚の都のように見えるのでした。子どもらは、みんな新らしい折のついた着物を着て、星めぐりの口笛を吹いたり、

「ケンタウルス、露をふらせ。」と叫んで走ったり、青いマグネシヤの花火を燃したりして、たのしうに遊んでいるのでした。けれどもジョバンニは、いつかまた深く首を垂れて、そこらのにぎやかさとはまるでちがったことを考えながら、牛乳屋の方へ急ぐのでした。

ジョバンニは、いつか町はずれのポプラの木が幾本も幾本も、高く星ぞらに浮んでいるところに来ていました。その牛乳屋の黒い門を入り、牛の匂のするうすくらい台所の前に立って、ジョバンニは帽子をぬいで「今晚は、」と云いましたら、家の中はしんとして誰も居たようではありませんでした。「今晚は、ごめんなさい。」ジョバンニはまっすぐに立ってまた叫びました。するとしばらくたってから、年老った女の人、どこか工合が悪いようにそろそろと出て来て何か用かと口の中で云いました。「あの、今日、牛乳が僕※とこへ来なかつたので、貰いにあがつたんです。」ジョバンニが一生けん命勢よく云いました。

「いま誰もいないでわかりません。あしたにして下さい。」

その人は、赤い眼の下のとこを擦りながら、ジョバンニを見おろして云いました。

「おっかさんが病氣なんですから今晚でないと困るんです。」

「ではもう少したつてから来て下さい。」その人はもう行ってしまいそうでした。

「そうですか。ではありがとうございます。」ジョバンニは、お辞儀をして台所から出ました。

十字になった町のかどを、まがろうとしましたら、向うの橋へ行く方の雑貨店の前で、黒い影やぼ

んやり白いシャツが入り乱れて、六七人の生徒らが、口笛を吹いたり笑ったりして、めいめい烏瓜の燈火^{あかり}を持ってやって来るのを見ました。その笑い声も口笛も、みんな聞きおぼえのあるものでした。ジョバンニの同級の子供らだったのです。ジョバンニは思わずどきっとして戻^{もど}ろうとしましたが、思い直して、一そう勢よくそっちへ歩いて行きました。

「川へ行くの。」ジョバンニが云おうとして、少しのどがつまったように思ったとき、

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ。」さっきのザネリがまた叫びました。

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ。」すぐみんなが、続いて叫びました。ジョバンニはまっ赤になって、もう歩いているかもわからず、急いで行きすぎようとしましたが、そのなかにカムパネラが居たのです。カムパネラは気の毒そうに、だまって少しわらって、怒^{おこ}らないだろうかというようにジョバンニの方を見ていました。

ジョバンニは、遁^にげるようにその眼を避^さけ、そしてカムパネラのせいの高いかたちが過ぎて行つて間もなく、みんなはてんでに口笛を吹きました。町かどを曲るとき、ふりかえって見ましたら、ザネリがやはりふりかえって見ていました。そしてカムパネラもまた、高く口笛を吹いて向うにぼんやり見える橋の方へ歩いて行ってしまったのでした。ジョバンニは、なんとも云えずきびしくなつて、いきなり走り出しました。すると耳に手をあてて、わああと云いながら片足でびよんぴよん跳^とんでいた小さな子供らは、ジョバンニが面白^{おもしろ}くてかけるのだと思つてわあいと叫びました。まもなくジョバンニは黒い丘^{おか}の方へ急ぎました。

天気輪てんきりんの柱

牧場のうしろはゆるい丘になって、その黒い平らな頂上は、北の大熊星おおぐまぼしの下に、ぼんやりふだんよりも低く連つて見えました。

ジョバンニは、もう露の降りかかった小さな林のこみちを、どんどんのぼつて行きました。まっくらな草や、いろいろな形に見えるやぶのしげみの間を、その小さなみちが、一すじ白く星あかりに照らしたされてあつたのです。草の中には、ぴかぴか青びかりを出す小さな虫もいて、ある葉は青くすかし出され、ジョバンニは、さつきみんなの持つて行つた烏瓜からすつりのあかりのようだとも思いました。

そのまっ黒な、松や檜ならの林を越え、俄かにがらんと空がひらけて、天の川あまがわがしらしらと南から北へ亘わたっているのが見え、また頂いただきの、天気輪の柱も見わけられたのでした。つりがねそうか野ぎくかの花が、そこらいちめんに、夢ゆめの中からでも薫かおりだしたというように咲き、鳥が一疋びき、丘の上を鳴き続けながら通つて行きました。

ジョバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どこどかするからだを、つめたい草に投げました。

町の灯は、暗やみの中をまるで海の底のお宮のけしきのようにともし、子供らの歌う声や口笛、きれぎれの叫さけび声もかすかに聞えて来るのでした。風が遠くで鳴り、丘の草もしずかにそよぎ、ジョバンニの汗あせでぬれたシャツもつめたく冷されました。ジョバンニは町のはずれから遠く黒くひろがった野原を見わたしました。

そこから汽車の音が聞えてきました。その小さな列車の窓は、一列小さく赤く見え、その中にはたきさんの旅人が、苹果を剥いたり、わらったり、いろいろな風に行っていると考えますと、ジョバンニは、もう何とも云えなくなつて、また眼をそらに挙げました。

あああの白いそらの帯がみんな星だというぞ。

ところがいくら見ても、そのそらはひる先生の云つたような、がらんとした冷いところとは思われませんでした。それどころでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧場やある野原のように考えられて仕方なかつたのです。そしてジョバンニは青い琴の星が、三つにも四つにもなつて、ちらちら瞬き、脚が何べんも出たり引つ込んだりして、とうとう輩のように長く延びるのを見ました。またすぐ眼の下のまぢまでがやっぱりぼんやりしたたくさんの星の集りか一つの大きなけむりかのように見えるように思いました。



銀河ステーション

「ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎いにきたんだ。」

カムパネルラは、なぜかそう云いながら、少し顔いろが青ざめて、どこか苦しいというふうでした。するとジョバンニも、なんだかどこかに、何か忘れたものがあるというような、おかしい気持ちが生じたままてしまいました。

ところがカムパネルラは、窓から外をのぞきながら、もうすっかり元気が直って、勢よく云いました。「ああしまった。ぼく、水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれど構わない。もうじき白鳥の停車場だから。ぼく、白鳥を見るなら、ほんとうにすきだ。川の遠くを飛んでいたって、ぼくはきつと見える。」そして、カムパネルラは、円い板のようになった地図を、しきりにぐるぐるまわして見っていました。まったくその中に、白くあらわされた天の川の左の岸に沿って一条の鉄道線路が、南へ南へとたどって行くのでした。そしてその地図の立派なことは、夜のようにまっ黒な盤の上に、一の停車場や三角標、泉水や森が、青や橙や緑や、うつくしい光でちりばめられてありました。ジョバンニはなんだかその地図をどこかで見たようにおもいました。

「この地図はどこで買ったの。黒曜石でできてるねえ。」

ジョバンニが云いました。

「銀河ステーションで、もらったんだ。君もらわなかったの。」

「ああ、ぼく銀河ステーションを通つたろうか。いまぼくたちの居るとこ、ここだろう。」

ジョバンニは、白鳥と書いてある停車場のしるしの、すぐ北を指しました。

「そうだ。おや、あの河原は月夜だらうか。」

そっちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすすきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさら、ゆられてうごいて、波を立てているのでした。

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ。」ジョバンニは云いながら、まるでね上りたいくらい愉快になって、足をこつこつ鳴らし、窓から顔を出して、高く高く星めぐりの口笛を吹きながら一生懸命延びあがって、その天の川の水を、見きわめようとしたが、はじめはどうしてもそれが、はつきりしませんでした。けれどもだんだん気をつけて見ると、そのきれいな水は、ガラスよりも水素よりもすきとおって、ときどき眼の加減か、ちらちら紫いろのこまかな波をたてたり、虹のようにざらつと光つたりしながら、声もなくどんどん流れて行き、野原にはあつちにもこつちにも、燐光の三角標が、うつくしく立っていたのです。遠いものは小さく、近いものは大きく、遠いものは橙や黄いろではつきりし、近いものは青白く少しかすんで、或いは三角形、或いは四辺形、あるいは電や鎖の形、さまざまにならんで、野原いっぱい光っているのです。ジョバンニは、まるでどきどきして、頭をやけに振りまわした。するとほんとうに、そのきれいな野原中の青や橙や、いろいろがやく三角標も、てんでに息をつくように、ちらちらゆれたり顫えたりしました。

「ぼくはもう、すっかり天の野原に来了。」ジョバンニは云いました。

「それにこの汽車石炭をたいていないねえ。」ジョバンニが左手をつき出して窓から前の方を見ながら

云いました。

「アルコールか電気だろう。」カムパネルラが云いました。

ごとごとごとごと、その小さなきれいな汽車は、そのすすきの風にひるがえる中を、天の川の水や、三角点の青じろい微光^{びこう}の中を、どこまでもどこまでもと、走って行くのでした。

「ああ、りんどうの花が咲いている。もうすっかり秋だねえ。」カムパネルラが、窓の外を指さして云いました。

線路のへりになったみじかい芝草^{しばくさ}の中に、月長石でも刻まれたような、すばらしい紫のりんどうの花が咲いていました。

「ぼく、飛び下りて、あいつをとって、また飛び乗ってみせようか。」ジョバンニは胸^{おど}を躍らせて云いました。

「もうだめだ。あんなにうしろへ行ってしまったから。」

カムパネルラが、そう云ってしまうかしまわないうち、次のりんどうの花が、いっぱい光って過ぎて行きました。

と思つたら、もう次から次から、たくさんいろいろな底をもったりりんどうの花のコップが、湧くように、雨のように、眼の前を通り、三角標の列は、けむるように燃えるように、いよいよ光って立ったのです。

北十字とプリオシン海岸

「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだろうか。」

いきなり、カムパネルラが、思い切ったというように、少しどもりながら、急ぎこんで云いました。
ジヨバンニは、

（ああ、そうだ、ぼくのおっかさんは、あの遠い一つのちりのように見える橙いろの三角標のあたりにいらっしやって、いまぼくのことを考えているんだった。）と思いながら、ぼんやりしてだまっています。

「ぼくはおっかさんが、ほんとうに幸になるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おっかさんのいちばんの幸なんだろう。」カムパネルラは、なんだか、泣きだしたいのを、一生けん命こらえているようでした。

「きみのおっかさんは、なんにもひどいことないじゃないの。」ジヨバンニはびつくりして叫びました。「ぼくわからない。けれども、誰だって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おっかさんは、ぼくをゆるして下さると思う。」カムパネルラは、なにかほんとうに決心しているように見えました。

俄かに、車のなかで、ぱつと白く明るくなりました。見ると、もうじつに、金剛石や草の露やあらゆる立派さをあつめたような、きらびやかな銀河の河床の上を水は声もなくかたちもなく流れ、その

流れのまん中に、ぼうつと青白く後光の射した一つの島が見えるのでした。その島の平らなただきに、立派な眼もさめるような、白い十字架がたつて、それはもう凍った北極の雲で鍔たといったらいいか、すきっとした金いろの円光をいただいて、しずかに永久に立っているのです。

「ハルレヤ、ハルレヤ。」前からもうしろからも声が起りました。ふりかえって見ると、車室の中の旅人たちは、みなまっすぐにきもののひだを垂れ、黒いバイブルを胸にあてたり、水晶の珠数をかけた、どの人もつましく指を組み合せて、そっちに祈っているのです。思わず二人もまっすぐに立ちあがりました。カムパネルラの頬は、まるで熟した苹果のあかしのようにうつくしくかがやいて見えました。

そして島と十字架とは、だんだんうしろの方へうつて行きました。

向う岸も、青じろくぼうつと光ってけむり、時々、やっぱりすすきが風にひるがえるらしく、さつとその銀いろがけむつて、息でもかけたように見え、また、たくさんのりんどうの花が、草をかくれたり出たりするのは、やさしい狐火のように思われました。

それもほんのちよつとの間、川と汽車との間は、すすきの列でさえぎられ、白鳥の島は、二度ばかり、うしろの方に見えましたが、じきもうずうつと遠く小さく、絵のようになってしまい、またすすきがざわざわ鳴って、とうとうすっかり見えなくなっていました。ジョバンニのうしろには、いつから乗っていたのか、せいの高い、黒いかつぎをしたカトリック風の尼さんが、まん円な緑の瞳を、じつとまっすぐに落して、まだ何かことばか声かが、そっちから伝わって来るのを、虔んで聞いているというように見えました。旅人たちはしずかに席に戻り、二人も胸いっぱいのかなしみに似た新ら

しい気持ちで、何気なくちがった語で、そつと談し合つたのです。

「もうじき白鳥の停車場だねえ。」

「ああ、十一時かつきりには着くんだよ。」

早くも、シグナルの緑の燈と、ぼんやり白い柱とが、ちらつと窓のそとを過ぎ、それから硫黄のほのおのようなくらいぼんやりした転てつ機の前のあかりが窓の下を通り、汽車はだんだんゆるやかに
なつて、間もなくプラットホームの前列の電燈が、うつくしく規則正しくあらわれ、それがだんだん
大きくなつてひろがつて、二人は丁度白鳥停車場の、大きな時計の前に来てとまりました。

さわやかな秋の時計の盤面には、青く灼かれたはがねの二本の針が、くつきり十一時を指しました。
みんなは、一ぺんに下りて、車室の中はがらんとなくなつてしまいました。

「二十分停車」と時計の下に書いてありました。

「ぼくたちも降りて見ようか。」ジョバンニが云いました。

「降りよう。」

二人は一度にはねあがつてドアを飛び出して改札口へかけて行きました。ところが改札口には、明
るい紫がかった電燈が、一つ点いているばかり、誰も居ませんでした。そこら中を見ても、駅長や
赤帽らしい人の、影もなかったのです。

二人は、停車場の前の、水晶細工のように見える銀杏の木に囲まれた、小さな広場に出ました。そ
こから幅の広いみちが、まっすぐに銀河の青光の中へ通っていました。

さきに降りた人たちは、もうどこへ行ったか一人も見えませんでした。二人がその白い道を、肩を

ならべて行きますと、二人の影は、ちょうど四方に窓のある室へやの中の、二本の柱の影のように、また二つの車輪の輻やのように幾本も幾本も四方へ出るのです。そして間もなく、あの汽車から見えたきれいな河原かわらにきました。

カムパネラは、そのきれいな砂を一つまみ、掌てのひらにひろげ、指できしきしさせながら、夢ゆめのように云っているのです。

「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えている。」

「そうだ。」どこでぼくは、そんなこと習ったろうと思ひながら、ジョバンニもぼんやり答えていました。河原の礫いしは、みんなすきとおつて、たしかに水晶や黄玉トパーズや、またくしゃくしゃの皺曲しゅうきよくをあらわしたのや、また稜かどから霧きりのような青白い光を出す鋼玉こくぎよくやらでした。ジョバンニは、走つてその渚なみだに行つて、水に手をひたしました。けれどもあやしいその銀河の水は、水素よりもっとすきとおつていたのです。それでもたしかに流れていたことは、二人の手首の、水にひたつたところが、少し水銀いろに浮ういたように見え、その手首にぶつかつてできた波は、うつくしい燐光りんこうをあげて、ちらちらと燃えるように見えたのもわかりました。

川上の方を見ると、すすきのいっぱいに生えている崖がけの下に、白い岩が、まるで運動場のように平らに川に沿つて出ているのです。そこに小さな五六十人のかげが、何か掘ほり出すか埋めるかしてゐるらしく、立たつたり屈かんだり、時々なにかの道具が、ピカツと光つたりしました。

「行つてみよう。」二人は、まるで一度に叫んで、そっちの方へ走りしました。その白い岩になつた処ところの入口に、

「ブリオシン海岸」という、瀬戸物のつるつるした標札が立って、向うの渚には、ところどころ、細い鉄の欄干も植えられ、木製のきれいなベンチも置いてありました。

「おや、変なものがあるよ。」カムパネルラが、不思議そうに立ちどまって、岩から黒い細長いさきの尖ったくるみの実のようなものをひろいました。

「くるみの実だよ。そら、沢山ある。流れて来たんじゃない。岩の中に入ってるんだ。」

「大きいね、このくるみ、倍あるね。こいつはすこしもいたんでない。」

「早くあすこへ行って見よう。きつと何か掘ってるから。」

二人は、ぎざぎざの黒いくるみの実を持ちながら、またさっきの方へ近よって行きました。左手の渚には、波がやさしい稲妻のように燃えて寄せ、右手の崖には、いちめん銀や貝殻でこさえたようなすすきの穂がゆれたのです。

だんだん近付いて見ると、一人のせいの高い、ひどい近眼鏡をかけ、長靴をはいた学者らしい人が、手帳に何かせわしそうに書きつけながら、鶴嘴をふりあげたり、スコップをつかったりしている、三人の助手らしい人たちに夢中でいろいろ指図をしていました。

「そのその突起を壊さないように。スコップを使いたまえ、スコップを。おっと、もう少し遠くから掘って。いけない、いけない。なぜそんな乱暴をするんだ。」

見ると、その白い柔らかな岩の中から、大きな大きな青じろい獣の骨が、横に倒れて潰れたという風になって、半分以上掘り出されていました。そして気をつけて見ると、そこらには、蹄の二つある足跡のついた岩が、四角に十ばかり、きれいに切り取られて番号がつけられてありました。

「君たちは参観かね。」その大学士らしい人が、眼鏡をきらつとさせて、こつちを見て話しかけました。「くるみが沢山あったろう。それはまあ、ざつと百二十万年ぐらい前のくるみだよ。ごく新しい方さ。ここは百二十万年前、第三紀のあところは海岸でね、この下からは貝がらも出る。いま川の流れているところに、そっくり塩水が寄せたり引いたりもしていたのだ。このけものかね、これはボスといつてね、おいおい、そこつるはしはよしたまえ。ていねいに鑿でやつてくれたまえ。ボスといつてね、いまの牛の先祖で、昔はたくさん居たさ。」

「標本にするんですか。」

「いや、証明するに要るんだ。ぼくらから見ると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年ぐらい前にできたという証拠もいろいろあがるけれども、ぼくらとちがったやつからみてもやっぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風か水やがらんとした空かに見えるかということなのだ。わかつたかい。けれども、おいおい。そこもスコップではいけない。そのすぐ下に肋骨が埋もれてる筈じゃないか。」大学士はあわてて走って行きました。

「もう時間だよ。行こう。」カムパネルラが地図と腕時計とをくらべながら云いました。

「ああ、ではわたくしどもは失礼いたします。」ジョバンニは、ていねいに大学士におじぎしました。「そうですか。いや、さよなら。」大学士は、また忙がしように、あちこち歩きまわって監督をはじめました。二人は、その白い岩の上を、一生けん命汽車におくれないうちに走りました。そしてほんとうに、風のように走れたのです。息も切れず膝もあつくありませんでした。

こんなにしてかけるなら、もう世界中だってかけられると、ジョバンニは思いました。



そして二人は、前のあの河原を通り、改札口の電燈がだんだん大きくなって、間もなく二人は、もとの車室の席に座^{すわ}って、いま行^いって来た方を、窓から見ていました。

鳥を捕とる人

「ここへかけてもようございますか。」

がさがさした、けれども親切そうな、大人の声が、二人のうしろで聞えました。

それは、茶いろの少しぼろぼろの外がい套とうを着て、白い巾きんでつつんだ荷物を、二つに分けて肩に掛かけた、赤髯あかひげのせなかのかがんだ人でした。

「ええ、いいんです。」ジョバンニは、少し肩をすぼめて挨拶あいさつしました。その人は、ひげの中でかすかに微笑わらいながら荷物をゆっくり網棚あみだなにのせました。ジョバンニは、なにか大へんさびしいようなかなしいような気がして、だまって正面の時計を見ていましたら、ずうっと前の方で、硝子ガラスの笛ふえのようなものが鳴りました。汽車はもう、しずかにうごいていたのです。カムパネルラは、車室てんじょうの天井を、あちこち見ていました。その一つのあかりに黒い甲虫かぶとむしがとまってその影が大きく天井にうつっていたのです。赤ひげの人は、なにかなつかしそうにわらいながら、ジョバンニやカムパネルラのようなすを見ていました。汽車はもうだんだん早くなって、すすきと川と、かわるがわる窓の外から光りました。

赤ひげの人が、少しおずおずしながら、二人に訊ききました。

「あなた方は、どちらへいらっしゃるんですか。」

「どこまでも行くんです。」ジョバンニは、少しきまり悪そうに答えました。

「それはいいね。この汽車は、じっさい、どこまでも行きますぜ。」

「あなたはどこへ行くんです。」カムパネルラが、いきなり、喧嘩けんかのようにたずねましたので、ジョバンニは、思わずわらいました。すると、向うの席に居た、尖った帽子をかぶり、大きな鍵かぎを腰こしに下げた人も、ちらっとこつちを見てわらいましたので、カムパネルラも、つい顔を赤くして笑いだしてしまいました。ところがその人は別に怒おこったでもなく、頬ほをびくびくしながら返事しました。

「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかまえる商売でね。」

「何鳥ですか。」

「鶴や雁がんです。さぎも白鳥もです。」

「鶴はたくさんいますか。」

「居ますとも、さっきから鳴いてまさあ。聞かなかったのですか。」

「いいえ。」

「いまでも聞えるじゃありませんか。そら、耳をすまして聴きいてごらんさい。」

二人は眼めを挙げ、耳をすましました。ごとごと鳴る汽車のひびきと、すすきの風との間から、ころんころんと水の湧わくような音が聞えて来るのでした。

「鶴、どうしてとるんですか。」

「鶴ですか、それとも鷺さぎですか。」

「鷺です。」ジョバンニは、どっちでもいいと思ひながら答えました。

「そいつはな、雑作ぞうさない。さぎというものは、みんな天の川の砂が凝こって、ぼおつとできるもんですからね、そして始終川へ帰りますからね、川原で待っていて、鷺がみんな、脚あしをこういう風にして下

りてくるところを、そいつが地べたへつくかつかないうちに、ぴたっと押えちまうんです。するともう鷺は、かたまつて安心して死んじまいます。あとはもう、わかり切つてまさあ。押し葉にするだけです。」

「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか。」

「標本じゃありません。みんなたべるじゃありませんか。」

「おかしいねえ。」カムパネルラが首をかしげました。

「おかしいも不審もありませんや。そら。」その男は立つて、網棚から包みをおろして、手ばやくくるくると解きました。

「さあ、ごらんなさい。いまとつて来たばかりです。」

「ほんとうに鷺だねえ。」二人は思わず叫びました。まっ白な、あのさっきの北の十字架のように光る鷺のからだだが、十ばかり、少しひらべつたくなつて、黒い脚をちぢめて、浮彫のようにならんでいたのです。

「眼をつぶつてゐるね。」カムパネルラは、指でそつと、鷺の三日月がたの白い瞑つた眼にさわりました。頭の上の槍のような白い毛もちゃんといっていました。

「ね、そうでしょう。」鳥捕りは風呂敷を重ねて、またくるくると包んで紐でくくりました。誰がいったいこころで鷺なんぞ喰べるだろうとジョバンニは思いながら訊きました。

「鷺はおいしいんですか。」

「ええ、毎日注文があります。しかし雁の方が、もつと売れます。雁の方がずっと柄がいいし、第一手数がありませんからな。そら。」鳥捕りは、また別の方の包みを解きました。すると黄と青じろと

まだらになって、なにかのあかりのようにひかる雁が、ちょうどさっきの鷺のように、くちばしを揃えて、少し扁べったくなくて、ならんでいました。

「こっちはすぐ喰べられます。どうです、少しおあがりなさい。」鳥捕りは、黄いろな雁の足を、軽くひっぱりました。するとそれは、チョコレートでもできているように、すつときれいにはなれました。「どうです。すこしたべてごらんなさい。」鳥捕りは、それを二つにちぎってわたししました。ジョバンニは、ちよつと喰べてみて、(なんだ、やつぱりこいつはお菓子だ。チョコレートよりも、もつとおいしいけれども、こんな雁が飛んでいるもんか。この男は、どこかそこの野原の菓子屋だ。けれどもぼくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべているのは、大へん気の毒だ。)とおもいながら、やつぱりぼくそれをたべていました。

「もしおあがりなさい。」鳥捕りがまた包みを出しました。ジョバンニは、もつとたべたかったのですけれども、

「ええ、ありがとう。」と云って遠慮しましたら、鳥捕りは、こんどは向うの席の、鍵をもった人に出しました。

「いや、商売ものを貰っちゃすみませんな。」その人は、帽子をとりました。

「いいえ、どういたしまして。どうです、今年の渡り鳥の景気は。」

「いや、すてきなもんですよ。一昨日の第二限ころなんか、なぜ燈台の灯を、規則以外に聞させるかって、あっちからもこっちからも、電話で故障が来ましたが、なあに、こっちがやるんじゃない、渡り鳥どもが、まっ黒にかたまって、あかしの前を通るのでから仕方ありませんや。わた

しあ、べらぼうめ、そんな苦情は、おれのどこへ持って来たって仕方がねえや、ばさばさのマントを着て脚と口との途方もなく細い大将へやれって、斯う云ってやりましたがね、はっは。」

すすきがなくなつたために、向うの野原から、ぱつとあかりが射して来ました。

「鷺の方はなぜ手数なんですか。」カムパネルは、さつきから、訊こうと思つていたので。

「それはね、鷺を喰べるには、」鳥捕りは、こっちに向き直りました。

「天の川の水あかりに、十日もつるして置かね、そうでなければ、砂に三四日うずめなければいけないんだ。そうすると、水銀がみんな蒸発して、喰べられるようになるよ。」

「こいつは鳥じゃない。ただのお菓子でしょう。」やっぱりおなじことを考えていたとみえて、カムパネルが、思い切つたというように、尋ねました。鳥捕りは、何か大へんあわてた風で、

「そうそう、ここで降りなければ。」と云いながら、立つて荷物をとつたと思うと、もう見えなくなつていました。

「どこへ行つたんだろう。」

二人は顔を見合せましたら、燈台守は、にやにや笑つて、少し伸びあがるようにしながら、二人の横の窓の外をのぞきました。二人もそつちを見ましたら、たつたいまの鳥捕りが、黄いろと青じろの、うつくしい燐光を出す、いちめんのかわらははこぐさの上に立つて、まじめな顔をして両手をひろげて、じつとそれを見ていたのです。

「あそこへ行つてる。ずいぶん奇体だねえ。きつとまた鳥をつかまえるとこだねえ。汽車が走つて行かないうちに、早く鳥がおけるといいな。」と云つた途端、がらんとした桔梗いろの空から、さつき

見たような鷺が、まるで雪の降るように、ぎゃあぎゃあ叫びながら、いっぱいには舞いおりて来ました。するとあの鳥捕りは、すっかり注文通りだというようにほくほくして、両足をかっつきり六十度に開いて立って、鷺のちぢめて降りて来る黒い脚を両手で片っ端から押えて、布の袋の中に入れるのでした。すると鷺は、蛍のように、袋の中でしばらく、青くべかべか光ったり消えたりしていました。おしまいというとう、みんなぼんやり白くなって、眼をつぶるのでした。ところが、つかまえられる鳥よりは、つかまえられるで無事に天の川の川の砂の上に降りるものの方が多かったのです。それは見ていると、足が砂へつくや否や、まるで雪の融けるように、縮まって扁べったくなって、間もなく熔鋳から出た銅の汁のように、砂や砂利の上にひろがり、しばらくは鳥の形が、砂についているのでした。それも二三度明るくなったり暗くなったりしているうちに、もうすっかりまわりと同じいろになってしまふのでした。

鳥捕りは二十疋ばかり、袋に入れてしまうと、急に両手をあげて、兵隊が鉄砲弾にあたって、死ぬときのような形をしました。と思つたら、もうそこに鳥捕りの形はなくなつて、却つて、

「ああせいせいした。どうもからだに恰度合うほど稼いでいるくらい、いいことはありませんな。」というききおぼえのある声が、ジョバンニの隣りにしました。見ると鳥捕りは、もうそこでとつて来た鷺を、きちんとそろえて、一つずつ重ね直しているのです。

「どうしてあすこから、いっぺんにここへ来たんですか。」ジョバンニが、なんだかあたりまえのような、あたりまえでないような、おかしな気がして問いました。

「どうしてって、来ようとしたから来たんです。ぜんたいあなた方は、どちらからおいでですか。」

ジョバンニは、すぐ返事しようと思いましたが、さあ、ぜんたいどこから来たのか、もうどうしても考えつきませんでした。カムパネルラも、顔をまっ赤にして何か思い出そうとしているのでした。

「ああ、遠くからですね。」鳥捕りは、わかったというように雑作なくうなずきました。

ジョバンニの切符^{きっぷ}

「もうここらは白鳥区のおしまいです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測所です。」

窓の外の、まるで花火でいっぱいのような、あまの川のまん中に、黒い大きな建物が四棟^{むね}ばかり立って、その一つの平屋根の上に、眼^めもさめるような、青宝玉^{サファイア}と黄玉^{トパーズ}の大きな二つのすきとおった球が、輪になってしずかにくるとまわっていました。黄いろのがだんだん向うへまわって行って、青い小さいのがこっちへ進んで来、間もなく二つのはじは、重なり合って、きれいな緑いろの両面凸^{とつ}レンズのかたちをつくり、それもだんだん、まん中がふくらみ出して、とうとう青いのは、すっかりトパーズの正面にきましたので、緑の中心と黄いろな明るい環^わとができました。それがまただんだん横へ外れて、前のレンズの形を逆に繰^くり返し、とうとうすつとはなれて、サファイアは向うへめぐり、黄いろのはこっちへ進み、また丁度さっきのような風になりました。銀河の、かたちもなく音もない水にかこまれて、ほんとうにその黒い測候所が、睡^{ねむ}っているように、しずかによこたわったのです。

「あれは、水の速さをはかる器械です。水も……。」鳥捕^{とりと}りが云いかけたとき、

「切符を拝見いたします。」三人の席の横に、赤い帽子をかぶったせいの高い車掌が、いつかまっすぐに立っていて云いました。鳥捕りは、だまってくしから、小さな紙きれを出しました。車掌はちよつと見て、すぐ眼をそらして、（あなたの方のは？）というように、指をうごかしながら、手をジョバンニたちの方へ出しました。

「さあ、」ジョバンニは困って、もじもじしていましたら、カムパネルラは、わけもないという風で、小さな鼠ねずみいろの切符を出しました。ジョバンニは、すっかりあわててしまつて、もしか上着のポケットにでも、入っていたかとおもいながら、手を入れて見ましたら、何か大きな畳たたんだ紙きれにあたりました。こんなもの入っていたらうかと思つて、急いで出してみましたら、それは四つに折つたはがきぐらいの大きさの緑いろの紙でした。車掌が手を出しているもんですから何でも構わない、やつちまえと思つて渡しましたら、車掌はまっすぐに立ち直つて丁寧ていねいにそれを開いて見ていました。そして読みながら上着のぼたんやなんかしきりに直したりしていましたし燈台看守も下からそれを熱心にのぞいていましたから、ジョバンニはたしかにあれば証明書か何かだつたと考えて少し胸が熱くなるような気がしました。

「これは三次空間の方からお持ちになつたのですか。」車掌がたずねました。

「何だかわかりません。」もう大丈夫だと安心しながらジョバンニはそつちを見あげてくつくつ笑いました。

「よろしゅうございます。南十字サウザンクロスへ着きますのは、次の第三時ころになります。」車掌は紙をジョバンニに渡して向うへ行きましました。

カムパネルラは、その紙切れが何だったか待ち兼ねたというように急いでのぞきこみました。ジョバンニも全く早く見たかったのです。ところがそれはいちめん黒い唐草からくさのような模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したものでだまって見ていると何だかその中へ吸い込まれてしまうような気がするのです。すると鳥捕りが横からちらつとそれを見てあわてたように云いました。

「おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんとうの天上へさえ行ける切符だ。天上どこじゃない、どこでも勝手にあるける通行券です。こいつをお持ちになれば、なるほど、こんな不完全な幻想げんそう第四次の銀河鉄道なんか、どこまでも行ける筈はずでさあ、あなた方大したもんですね。」

「何だかわかりません。」ジョバンニが赤くなって答えながらそれを又また畳んでかくしに入れました。そしてきまりが悪いのでカムパネルラと二人、また窓の外をながめていましたが、その鳥捕りの時々大したもんだというようにちらちらこちを見ているのがぼんやりわかりました。

「もうじき鷺わしの停車場だよ。」カムパネルラが向う岸の、三つならんだ小さな青じろい三角標と地図とを見較みくらべて云いました。

ジョバンニはなんだかわけもわからずににわかにとりの鳥捕りが気の毒でたまらなくなりました。鷺わしをつかまえてせいせいしたとよろこんだり、白いきれでそれをくるくる包んだり、ひとの切符をびっくりしたように横目で見てあわててほめだしたり、そんなことを一一考えていると、もうその見ず知らずの鳥捕りのために、ジョバンニの持っているものでも食べるものでもなんでもやってしまいたい、もうこの人のほんとうの幸さいわいになるなら自分があの光る天の川の河原かわらに立って百年つづけて立って鳥をとってやつてもいいというような気がして、どうしてももう黙だまっていられなくなりました。

ほんとうにあなたのほしいものは一体何ですか、と訊こうとして、それではあんまり出し抜けだから、どうしようかと考えて振り返って見ましたら、そこにはもうあの鳥捕りが居ませんでした。網棚の上には白い荷物も見えなかったのです。また窓の外で足をふんばってそらを見上げて鷺を捕る支度をしているのかと思って、急いでそっちを見ましたが、外はいちめんのうつくしい砂子と白いすすきの波ばかり、あの鳥捕りの広いせなかも尖った帽子も見えませんでした。

「あの人どこへ行つたらう。」カムパネルラもぼんやりそう云っていました。

「どこへ行つたらう。一体どこでまたあうのだろう。僕はどうしても少しあの人に物を言わなかったらう。」

「ああ、僕もそう思っているよ。」

「僕はある人が邪魔なような気がしたんだ。だから僕は太へんつらい。」ジョバンニはこんな変てこな気もちは、ほんとうにはじめてだし、こんなこと今まで云ったこともないと思いました。

「何だか苹果の匂がする。僕いま苹果のこと考えたためだろうか。」カムパネルラが不思議そうにあたりを見まわしました。

「ほんとうに苹果の匂だよ。それから野茨の匂もする。」ジョバンニもそこらを見ましたがやっぱりそれは窓からでも入って来るらしいのです。いま秋だから野茨の花の匂のする筈はないとジョバンニは思いました。

そしたら俄かにそこに、つやつやした黒い髪かみの六つばかりの男の子が赤いジャケツのぼたんもかけずひどくびつくりしたような顔をしてがたがたふるえてはだしで立っていました。隣りには黒い洋服

をきちんと着たせいの高い青年が一ぱいに風に吹かれていけるけやきの木のような姿勢で、男の子の手をしっかりとひいて立っていました。

「あら、ここどこでしょう。まあ、きれいだわ。」青年のうしろにもひとり十二ばかりの眼の茶いろな可愛らしい女の子が黒い外套を着て青年の腕にすがって不思議そうに窓の外を見ているのです。

「ああ、ここはランカシヤイヤだ。いや、コンネクテカット州だ。いや、ああ、ぼくたちはそらへ来たのだ。わたしたちは天へ行くのです。ごらんささい。あのしるしは天上のしるしです。もうなんにもこわいことありません。わたくしたちは神さまに召されているのです。」黒服の青年はよろこびにかがやいてその女の子に云いました。けれどもなぜかまた額に深く皺を刻んで、それに大へんつかれているらしく、無理に笑いながら男の子をジョバンニのとなりに座らせました。

それから女の子にやさしくカムパネルラのとなりの席を指さしました。女の子はすなおにそこへ座って、きちんと両手を組み合しました。

「ぼくおねえさんのところへ行くんだよう。」腰掛けばかりの男の子は顔を変にして燈台看守の向うの席に座ったばかりの青年に云いました。青年は何とも云えず悲しそうな顔をして、じつとその子の、ちぢれてぬれた頭を見ました。女の子は、いきなり両手を顔にあててしくしく泣いてしまいました。「お父さんやきくよねえさんはまだいろいろお仕事があるのです。けれどももうすぐあとからいらっしやいます。それよりも、おっかさんはどんなに永く待っていらっしやったでしょう。わたしの大事なタダシはいまどんな歌をうたっているだろう、雪の降る朝にみんなと手をつないでぐるぐるにわたこのやぶをまわってあそんでいるだろうかと考えたたりほんとうに待って心配していらっしやるんです

から、早く行っておつかさんにお目にかかりましょうね。」

「うん、だけど僕、船に乗らなけあよかったなあ。」

「ええ、けれど、ごらんさい、そら、どうです、あの立派な川、ね、あすこはあの夏中、ツイングル、ツイングル、リトル、スターをうたつてやすむとき、いつも窓からぼんやり白く見えていたでしょう。あすこですよ。ね、きれいでしょう、あんなに光っています。」

泣いていた姉もハンケチで眼をふいて外を見ました。青年は教えるようにそつと姉弟にまた云いました。

「わたしたちはもうなんにもかなしいことないのです。わたしたちはこんないところを旅して、じき神さまのそこへ行きます。そこならもうほんとうに明るくて匂がよくて立派な人たちでいっぱいです。そしてわたしたちの代りにボートへ乗れた人たちは、きつとみんな助けられて、心配して待っているめいめいのお父さんやお母さんや自分のお家へやら行くのです。さあ、もうじきですから元氣を出しておもしろくうたつて行きましょう。」青年は男の子のぬれたような黒い髪をなで、みんなを慰めながら、自分もだんだん顔いろががやいて来しました。

「あなた方はどちらからいらつしやつたのですか。どうなすつたのですか。」さっきの燈台看守がやつと少しわかつたように青年にたずねました。青年はかすかにわらいました。

「いえ、氷山にぶつつかつて船が沈みましてね、わたしたちはこちらのお父さんが急な用で二ヶ月前一足さきに本国へお帰りになつたのであとから発つたのです。私は大学へはいついて、家庭教師にやとわれていたのです。ところがちょうど十二日目、今日か昨日のあたりです、船が氷山にぶつ

かつて一ぺんに傾きもう沈みかけました。月のあかりはどこかぼんやりありましたが、霧が非常に深かったのです。ところがボートは左舷の方半分はもうだめになっていましたから、とてもみんなは乗り切らないのです。もうそのうちにも船は沈みますし、私は必死となって、どうか小さな人たちを乗せて下さいと叫びました。近くの人たちはすぐみちを開いてそして子供たちのために祈って呉れました。けれどもそこからボートまでのところにはまだまだ小さな子どもたちや親たちやなんか居て、とても押しのける勇気がなかったのです。それでもわたくしはどうしてもこの方たちをお助けするのが私の義務だと思いましたから前にいる子供らを押しのけようと思いました。けれどもまたそんなにして助けてあげるよりはこのまま神のお前にみんなで行く方がほんとうにこの方たちの幸福だとも思いました。それからまたその神にそむく罪はわたくしひとりです。子どもらばかりボートの中へはなしてやってお母さんが狂気のようにキスを送りお父さんがかなしいのをじっとこらえてまっすぐに立っているなどとももう腸もちぎれるようでした。そのうち船はもうずんずん沈みますから、私はもうすっかり覚悟してこの人たち二人を抱いて、浮べるだけは浮ぼうとかたまつて船の沈むのを待っていました。誰が投げたかライフブイが一つ飛んで来ましたがそれでも滑ってずうっと向うへ行ってしまう。私は一生けん命で甲板の格子になったとこをはなして、三人それにしっかりとつきました。どこからともなく 番の声があがりました。たちまちみんなはいろいろな国語で一ぺんにそれをうたいました。そのとき俄かに大きな音がして私たちは水に落ちもう渦に入ったと思ひながらしつかりこの人たちをだいてそれからぼうつとしたと思つたらもうここへ来ていたのです。この方たちのお母さ

んは一昨年没^{なく}なりました。ええボートはきつと助かったにちがいありません、何せよほど熟練な水夫たちが漕^こいですばやく船からはなれていましたから。」

そこから小さいのりの声が聞えジョバンニもカムパネルラもいままで忘れていたいろいろのことをぼんやり思い出して眼^めが熱くなりました。

（ああ、その大きな海はパシフィックというのではなかったろうか。その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗って、風や凍^{こお}りつく潮水や、烈^{はげ}しい寒さとたたかって、たれかが一生けんめいはたっている。ぼくはそのひとにほんとうに気の毒でそしてすまないような気がする。ぼくはそのひとのさいわいのためにいったいどうしたらいいのだろう。）ジョバンニは首を垂れて、すっかりふさぎ込んでしまいました。

「なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそれがただしいみちを進む中でのできごとなら峠^{とうげ}の上りも下りもみんなほんとうの幸福に近づく一あしずつですから。」

燈台守がなぐさめていました。

「ああそうです。ただいばんのさいわいに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめします。」青年が祈^きるようにそう答えました。

そしてあの姉弟^{きょうだい}はもうつかれてめいめいぐったり席によりかかって睡^{ねむ}っていました。さっきのあのはだしだった足にはいつか白い柔^{やわ}らかな靴^{くつ}をはいていたのです。

ごとごとごとと汽車はきらびやかな燐光^{りんこう}の川の岸を進みました。向うの方の窓を見ると、野原はまるで幻燈^{げんととう}のようでした。百も千もの大小さまざまな三角標、その大きなものの上には赤い点点をうつ

た測量旗も見え、野原のはてはそれらがいちめん、たくさんたくさん集ってぼおつと青白い霧のよう、そこからかまたはもつと向うからかときどきさまさまの形のぼんやりした狼煙のろしのようなものが、かわるがわるきれいな桔梗ききょういろのそらにうちあげられるのでした。じつにそのすきとおった奇麗きれいな風は、ばらの匂においでいっぱいでした。

「いかがですか。こういう苹果りんごはおはじめてでしょう。」向うの席の燈台看守がいつか黄金きんと紅でうつくしくいろどられた大きな苹果を落さないように両手で膝ひざの上にかかえていました。

「おや、どこから来たのですか。立派ですねえ。こちらではこんな苹果ができるのですか。」青年はほんとうにびつくりしたらしく燈台看守の両手にかかえられた一もりの苹果を眼を細くしたり首をまげたりしながらわれを忘れてながめていました。

「いや、まあおとり下さい。どうか、まあおとり下さい。」

青年は一つとつてジョバンニたちの方をちよつと見ました。

「さあ、向うの坊ちゃんぼっちゃんがた。いかがですか。おとり下さい。」

ジョバンニは坊ちゃんといわれたのですこししゃくにさわってだまっていますがカムパネルは「ありがたい、」と云いました。すると青年は自分にとって一つずつ二人に送ってよこしましたのでジョバンニも立ってありがたいと云いました。

燈台看守はやつと両腕りょううでがあいたのでこんどは自分で一つずつ睡っている姉弟の膝にそつと置きしました。

「どうもありがたい。どこでできるのですか。こんな立派な苹果は。」

青年はつくづく見ながら云いました。

「この辺ではもちろん農業はいたしますけれども大ていひとりでもいいものができるとなると約束になつて居ります。農業だつてそんなに骨は折れはしません。たいてい自分の望む種子さえ播けばひとりでにどんどんできます。米だつてパシフィック辺のように殻もないし十倍も大きくて匂もいいのです。けれどもあなたがたのいらっしゃる方なら農業はもうありません。苹果だつてお菓子だつてかすが少しもありませんからみんなそのひとそのひとによつてちがつたわずかのいいかおりになつて毛あなからちらけてしまうのです。」

にわかに男の子がぱっちり眼をあいて云いました。

「ああ、ぼくいまお母さんの夢をみていたよ。お母さんがね、立派な戸棚とだなや本のあるところに居てね、ぼくの方を見て手をだしてにこにこにこわらったよ。ぼくおっかさん。りんごをひろってきてあげます。しょうか云ったら眼がさめちゃった。ああこさつきの汽車のなかだねえ。」

「その苹果りんごがそこにあります。このおじさんにいただいたのですよ。」青年が云いました。

「ありがとうおじさん。おや、かおるねえさんまだねてるねえ、ぼくおこしてやろう。ねえさん。ごらんりんごをもらったよ。おきてごらん。」

姉はわらって眼をさましまぶしそうに両手を眼にあててそれから華果を見ました。男の子はまるでパイを喰べるようにもうそれを喰べていました、また折角剥いたそのきれいな皮も、くるくるコルク抜きのような形になつて床へ落ちるまでの間にはすうと、灰いろに光つて蒸発してしまふのでした。

二人はりんごを大切にポケットにしまいました。

川下の向う岸に青く茂った大きな林が見え、その枝には熟してまっ赤に光る円い実がいっぱい、その林のまん中に高い高い三角標が立って、森の中からはオーケストラベルやジロフォンにまじって何とも云えずきれいな音いろが、とけるように浸みるように風につれて流れて来るのでした。

青年はぞくつとしてからだをふるうようにしました。

だまってその譜を聞いていると、そこらにいちめん黄いろやうすい緑の明るい野原か敷物かがひろがり、またまっ白な蛸のような露が太陽の面を擦めて行くように思われました。

「まあ、あの烏。」カムパネルラのとりのかおると呼ばれた女の子が叫びました。

「からすでない。みんなかささぎだ。」カムパネルラがまた何気なく叱るように叫びましたので、ジョバンニはまた思わず笑い、女の子はきまり悪そうにしました。まったく河原の青じろいあかりの上に、黒い鳥がたくさんたくさんいっぱいに列になってとまってじつと川の微光を受けているのでした。

「かささぎですねえ、頭のうしろのところに毛がぴんと延びてますから。」青年はとりなすように云いました。

向うの青い森の中の三角標はすっかり汽車の正面に来ました。そのとき汽車のずうつとうしろの方からあの聞きなれた 番の讚美歌のふしが聞えてきました。よほどの人数で合唱しているらしいのでした。青年はさつと顔いろが青ざめ、たつて一ぺんそっちへ行きそうにしましたが思いかえしてまた座りました。かおる子はハンケチを顔にあててしまいました。ジョバンニまで何だか鼻が変になりました。けれどもいつともなく誰ともなくその歌は歌い出されだんだんはつきり強くなりました。思わずジョバンニもカムパネルラも一緒にうたい出したのです。

そして青い橄欖^{かんらん}の森が見えない天の川の向うにさめざめと光りながらだんだんうしろの方へ行つてしまひそこから流れて来るあやしい楽器の音ももう汽車のひびきや風の音にすり耗^へらされてずうつかすかになりました。

「あ孔雀^{くじゃく}が居るよ。」

「ええたくさん居たわ。」女の子がこたえました。

ジョバンニはその小さく小さくなつていまはもう一つの緑いろの貝^{かい}ぼたんのように見える森の上にさつさと青じろく時々光つてその孔雀がはねをひろげたりとじたりする光の反射を見ました。

「そうだ、孔雀の声だつてさつき聞えた。」カムパネラがかおる子に云^いいました。

「ええ、三十疋^{びき}ぐらいはたしかに居たわ。ハープのように聞えたのはみんな孔雀よ。」女の子が答えました。ジョバンニは俄^{にわ}かに何とも云えずかなしい気がして思わず

「カムパネラ、ここからはねおりて遊んで行こうよ。」とこわい顔をして云おうとしたくらいでした。

川は二つにわかれしました。そのまっくらな島のまん中に高い高いやぐらが一つ組まれてその上に一人の寛^{ゆる}い服を着て赤い帽子^{ぼうし}をかぶった男が立っていました。そして両手に赤と青の旗をもつてそらを見上げて信号しているのです。ジョバンニが見ている間その人はしきりに赤い旗をふっていました。が俄かに赤旗をおろしてうしろにかくすようにし青い旗を高く高くあげてまるでオーケストラの指揮者のように烈^{はげ}しく振^ふりました。すると空中にざあっと雨のような音がして何かまっくらなものがいくかたまりもいくかたまりも鉄砲丸^{てつぽうだま}のように川の向うの方へ飛んで行くのです。ジョバンニは思わず窓からからだを半分出してそっちを見あげました。美しい美しい桔梗^{ききよう}いろのがらんとした空の下を実

に何万という小さな鳥どもが幾組も幾組もめいめいせわしくせわしく鳴いて通って行くのでした。

「鳥が飛んで行くな。」ジョバンニが窓の外で云いました。

「どら、」カムパネルラもそれを見ました。そのときあのやぐらの上のゆるい服の男は俄かに赤い旗をあげて狂気きやうきのようにふりうごかしました。するとぴたっと鳥の群は通らなくなりそれと同時にぴしゃあんという潰つぶれたような音が川下の方で起ってそれからしばらくしらいんとしました。と思ったらあの赤帽の信号手がまた青い旗をふって叫さけんでいたのです。

「いまこそわたれわたり鳥、いまこそわたれわたり鳥。」その声もはつきり聞えました。それといっしょにまた幾万という鳥の群がそれをまっすぐにかけたのです。二人の顔を出しているまん中の窓からあの女の子が顔を出して美しい頬ほをかがやかせながらそれを仰あおぎました。

「まあ、この鳥、たくさんですわねえ、あらまあそのきれいなこと。」女の子はジョバンニにはなしかけましたけれどもジョバンニは生意気ないやだいたいと思ひながらだまって口をむすんでそれを見あげていました。女の子は小さくほつと息をしてだまって席もどへ戻りました。カムパネルラが気の毒そうに窓から顔を引っ込めて地図を見ていました。

「あの人鳥へ教えてるんでしょうか。」女の子がそつとカムパネルラにたずねました。

「わたり鳥へ信号してるんです。きつとどこからかのろしがあがるためでしょう。」カムパネルラが少しおぼつかないやうに答えました。そして車の中はしいんとなりました。ジョバンニはもう頭を引っ込めたかったのですけれども明るいこへ顔を出すのがつらかったのでだまってこらえてそのまま立つて口笛くちふえを吹いていました。

（どうして僕はこんなにかなしいのだろう。僕はもつところもちをきれいに大きくもたなければいけない。あすこの岸のずうっと向うにまるでけむりのような小さな青い火が見える。あれはほんとうにしずかでつめたい。僕はあれをよく見てころもちをしずめるんだ。）ジョバンニは熱くて痛いあたまを両手で押えるようにしてそっちの方を見ました。（ああほんとうにどこまでもどこまでも僕といっしょに行くひとはないだろうか。カムパネルラだってあんな女の子とおもしろそうに談話している僕はほんとうにつらいなあ。）ジョバンニの眼はまた涙でいっぱいになり天の川もまるで遠くへ行つたようにぼんやり白く見えるだけでした。

そのとき汽車はだんだん川からはなれて崖の上を通るようになりました。向う岸もまた黒いいろいろの崖が川の岸を下流に下るにしたがってだんだん高くなって行くのでした。そしてちらつと大きなとうもろこしの木を見ました。その葉はぐるぐるに縮れ葉の下にはもう美しい緑いろの大きな苞が赤い毛を吐いて真珠のような実もちらつと見えたのでした。それはだんだん数を増して来てもういまは列のように崖と線路との間にならび思わずジョバンニが窓から顔を引つ込めて向う側の窓を見ましたときは美しいそのの野原の地平線のはてまでその大きなとうもろこしの木がほとんどいちめんに植えられてさやさや風にゆらぎその立派なちぢれた葉のさきからはまるでひるの間にいっぱい日光を吸った金剛石のように露がいつぱいについて赤や緑やきらきら燃えて光っているのです。カムパネルラが「あれとうもろこしだねえ」とジョバンニに云いましたけれどもジョバンニはどうしても気持がなおりませんでしたからただぶつきり棒に野原を見たまま「そうだろう。」と答えました。そのとき汽車はだんだんしずかになっていくつかのシグナルとてんてつ器の灯を過ぎ小さな停車場にとまりました。

その正面の青じろい時計はかつきり第二時を示しその振子は風もなくなり汽車もうごかずしずかなしずかな野原のなかにカチッカチツと正しく時を刻んで行くのでした。

そしてまったくその振子の音のたえまを遠くの遠くの野原のはてから、かすかなかすかな旋律が糸のように流れて来るのでした。「新世界交響楽だわ。」姉がひとりごとのようにこつちを見ながらそつと云いました。全くもう車の中ではあの黒服の丈高い青年も誰もみんなやさしい夢を見ているのでした。

（こんなしずかないいところで僕はどうしてもつと愉快になれないだろう。どうしてもこんなにひとりさびしいのだろう。けれどもカムパネルラなんかあんまりひどい、僕といつしよに汽車に乗っていないがらまるであんな女の子とばかり談話しているんだもの。僕はほんとうにつらい。）ジョバンニはまた両手で顔を半分かくすようにして向うの窓のそとを見つめていました。すきとおった硝子のような笛が鳴って汽車はしずかに動き出し、カムパネルラもさびしそうに星めぐりの口笛を吹きました。

「ええ、ええ、もうこの辺はひどい高原ですから。」うしろの方で誰かとしよりらしい人のいま眼がさめたという風ではきはき談話している声がしました。

「とうもろこしだって棒で二尺も孔をあけておいてそこへ播かないと生えないんです。」

「そうですか。川まではよほどありますでしょうかねえ、」

「ええええ河までは二千尺から六千尺あります。もうまるでひどい峡谷になつています。」

そうそうここはコロラドの高原じゃなかったろうか、ジョバンニは思わずそう思いました。カムパネルラはまださびしそうにひとり口笛を吹き、女の子はまるで絹で包んだ苹果のような顔いろをして

ジョバンニの見る方を見ていたのでした。突然^{とつぜん}とうもろこしがなくなって巨^{おお}きな黒い野原がいつぱいにひらけました。新世界交響楽はいよいよはつきり地平線のはてから湧^わきそのまっ黒な野原のなかを一人のインデアンが白い鳥の羽根を頭につけたくさんの石を腕^{うで}と胸にかざり小さな弓に矢^やを番^{つが}えて一目散^{いちもくさん}に汽車を追って来るのでした。

「あら、インデアンですよ。インデアンですよ。ごらんなさい。」

黒服の青年も眼をさました。ジョバンニもカムパネルラも立ちあがりました。

「走って来るわ、あら、走って来るわ。追いかけているんですよ。」

「いいえ、汽車を追ってるんじゃないんですよ。獵^{りよう}をするか踊^{おど}るかしてるんですよ。」青年はいまどこに居るか忘れたという風にポケットに手を入れて立ちながら云いました。

まったくインデアンは半分は踊っているようでした。第一かけるにしても足のふみようがもつと経済もとれ本気にもなれそうでした。にわかにくつきり白いその羽根は前の方へ倒^{たふ}れるようになりインデアンはびたつと立ちどまってすばやく弓を空にひきました。そこから一羽の鶴^{つる}がふらふらと落ちて来てまた走り出したインディアンの大きくひろげた両手に落ちこみました。インデアンはうれしそうに立ってわらいました。そしてその鶴をもつてこつちを見ている影^{かげ}ももうどんどん小さく遠くなり電しんばしらの碍子^{がいし}がきらつきらつと続いて二つばかり光ってまたとうもろこしの林になってしまいました。こつち側の窓を見ますと汽車はほんとうに高い高い崖^{がけ}の上を走っていてその谷の底には川がやっぱり幅^{はば}ひろく明るく流れていたのです。

「ええ、もうこの辺から下りです。何せこんどは一ぺんにあの水面までおりて行くんですから容易じゃ

ありません。この傾斜^{けいし}があるもんですから汽車は決して向うからこっちへは来ないんです。それ、もうだんだん早くなったでしょう。」さっきの老人らしい声が云いました。

どんどんどんどん汽車は降りて行きました。崖^{かき}のはじに鉄道がかかるときは川が明るく下にのぞけたのです。ジョバンニはだんだんこころもちが明るくなって来ました。汽車が小さな小屋の前を通ってその前にしょんぼりひとりの子供が立ってこっちを見ているときなどは思わずほうと叫びました。

どんどんどんどん汽車は走って行きました。室中^{へんじゅう}のひとたちは半分うしろの方へ倒れるようになりながら腰掛^{こしかけ}にしっかりとしがみついていた。ジョバンニは思わずカムパネルラとわらいました。もうそして天の川は汽車のすぐ横手をいままでよほど激^{はげ}しく流れて来たらしくときどきちらちら光ってながれているのでした。うすあかい河原^{かわら}なでしこの花があちこち咲いていました。汽車はようやく落ち着いたようにゆっくりと走っていました。

向うとこっちの岸に星のかたちとつるはしを書いた旗がたっていました。

「あれ何の旗だろうね。」ジョバンニがやつとものを云いました。

「さあ、わからないねえ、地図にもないんだもの。鉄の舟^{ふね}がおいてあるねえ。」

「ああ。」

「橋^かを架けるとこじゃないんですか。」女の子が云いました。

「あああれ工兵の旗だねえ。架橋^{かきょう}演習^{えんしゅ}をしているんだ。けれど兵隊のかたちが見えないねえ。」

その時向う岸ちかくの少し下流の方で見えない天の川の水がざらっと光って柱のように高くはねあがりどおと烈^{はげ}しい音がしました。

「発破だよ、発破だよ。」カムパネルラはこどりました。

その柱のようになった水は見えなくなり大きな鮭や鱒がきらつきらつと白く腹を光らせて空中に抛り出されて円い輪を描いてまた水に落ちました。ジョバンニはもうはねあがりたいくらい気持ちが軽くなつて云いました。

「空の工兵大隊だ。どうだ、鱒やなんかがまるでこんなになつてはねあげられたねえ。僕こんな愉快な旅はしたことない。いいねえ。」

「あの鱒なら近くで見たらこれくらいあるねえ、たくさんさかな居るんだな、この水の中に。」

「小さなお魚もいるんでしょうか。」女の子が談につり込まれて云いました。

「居るんでしょう。大きなのが居るんだから小さいのもいるんでしょう。けれど遠くだからいま小さいの見えなかったねえ。」ジョバンニはもうすっかり機嫌が直つて面白そうにわらつて女の子に答えました。

「あれきつと双子のお星さまのお宮だよ。」男の子がいきなり窓の外をさして叫びました。

右手の低い丘の上に小さな水晶でもこさえたような二つのお宮がならんで立っていました。

「双子のお星さまのお宮って何だい。」

「あたし前になんべんもお母さんから聴いたわ。ちゃんと小さな水晶のお宮で二つならんでいるからきつとそうだわ。」

「はなしてごらん。双子のお星さまが何したつての。」

「ぼくも知ってらい。双子のお星さまが野原へ遊びにでてからすと喧嘩したんだろう。」

「そうじゃないわよ。あのね、天の川の岸にね、おっかさんお話をすったわ、……」

「それから彗星^{ほうきぼし}がギーギーフリーフリーと云って来たねえ。」

「いやだわたちちゃんそうじゃないわよ。それはべつの方だわ。」

「するとあすこにいま笛^{ふえ}を吹いて居るんだらうか。」

「いま海へ行つてらあ。」

「いけないわよ。もう海からあがつていらつしやつたのよ。」

「そうそう。ぼく知つてらあ、ぼくおはなししよう。」

川の向う岸が俄^{にわ}かに赤くなりました。楊^{やなぎ}の木や何かまっ黒にすかし出され見えない天の川の波もときどきちらちら針のように赤く光りました。まったく向う岸の野原に大きなまっ赤な火が燃されその黒いけむりは高く桔梗^{ききよう}いろのつめたそうな天をも焦^こがしそうでした。ルビーよりも赤くすぎとおりリチウムよりもうつくしく酔^よつたようになってその火は燃えているのでした。

「あれは何の火だらう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだらう。」ジョバンニが云^いいました。「蠅^{せう}の火だな。」カムパネラが又^{また}地図と首^{くび}つ引きして答えました。

「あら、蠅^{せう}の火のことならあたし知つてゐるわ。」

「蠅^{せう}の火ってなんだい。」ジョバンニがききました。

「蠅^{せう}がやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるってあたし何べんもお父さんから聴いたわ。」

「蠅^{せう}って、虫だらう。」

「ええ、蝸は虫よ。だけどいい虫だわ。」

「蝸いい虫じゃないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾にこんなかぎがあつてそれで螫^さされると死ぬって先生が云ったよ。」

「そうよ。だけどいい虫だわ、お父さん斯^こう云ったのよ。むかしのバルドラの野原に一ぴきの蝸がいて小さな虫やなんか殺してたべて生きていたんですって。するとある日いたちに見附^{みつ}かつて食べられそうになったんですって。さそりは一生存^にけん命^に通^にげて逃げたけどとうとういたちを押^{おさ}えられそうになつたわ、そのときいきなり前に井戸があつてその中に落ちてしまつたわ、もうどうしてもあがられないでさそりは溺^{おぼ}れはじめたのよ。そのときさそりは斯^こう云つてお祈^{いの}りしたというの、

ああ、わたしはいままでいくつのものの命をとつたかわからない、そしてその私がこんどいたちにとられようとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもとうとうこんなになつてしまつた。ああなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまつていたちに呉^くれてやらなかつたろう。そしたらいたちも一日生きのびたろうに。どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにむなしく命をすてずどうかこの次にはまことのみんなの幸^{さいわい}のために私のからだをおつかい下さい。つて云つたというの。そしたらいつか蝸はじぶんのからだがまつ赤なうつくしい火になつて燃えてよるのやみを照らしているのを見たって。いまでも燃えてるってお父さん仰^{おつしや}つたわ。ほんとうにあの火それだわ。」

「そうだ。見たまえ。そこらの三角標はちょうどさそりの形にならんでいるよ。」

ジョバンニはまったくその大きな火の向うに三つの三角標がちょうどさそりの腕^{うで}のようにこつちに

五つの三角標がさそりの尾やかぎのようにならんでいるのを見ました。そしてほんとうにそのまつ赤なうつくしいさそりの火は音なくあかるくあかるく燃えたのです。

その火がだんだんうしろの方になるにつれてみんなは何とも云えずにぎやかなさまざまの樂の音や草花の匂におのようなもの口笛や人々のざわざわ云う声やらを聞きました。それはもうじきかくに町か何かがあつてそこにお祭でもあるというような気がするのです。

「ケンタウル露つゆをふらせ。」いきなりいままで睡ねむっていたジョバンニのとなりの男の子が向うの窓を見ながら叫んでいました。

ああそこにはクリスマストリイのようにまつ青な唐檜とうひかみみの木がたつてその中にはたくさんのかくさんの豆電燈まめでんとうがまるで千の螢ほたるでも集つたようについていました。

「ああ、そうだ、今夜ケンタウル祭だねえ。」

「ああ、ここはケンタウルの村だよ。」カムパネルラがすぐ云いました。

「ボール投げなら僕ぼく決きしてはささない。」

男の子が大威張おおいばりで云いました。

「もうじきサウザンクロスです。おける支度したくをして下さい。」青年がみんなに云いました。

「僕も少し汽車へ乗つてるんだよ。」男の子が云いました。カムパネルラのとなりの女の子はそわそわ立って支度をはじめましたけれどもやっぱりジョバンニたちとわかれたくないようなようすでした。

「ここでおりにけあいけないのです。」青年はきちつと口を結んで男の子を見おろしながら云いました。

「厭^{いや}だい。僕もう少し汽車へ乗ってから行くんだい。」

ジョバンニがこらえ兼ねて云いました。

「僕たちと一緒に乗って行こう。僕たちどこまでだって行ける切符持^{きつ}ってるんだ。」

「だけどあたしたちもうここで降りないといけないのよ。ここ天上へ行くとこなんだから。」女の子がさびしそうに云いました。

「天上へなんか行かなくなつていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりもっといいところをこさえないといけないって僕の先生が云つたよ。」

「だつておつ母さんも行つてらっしゃるしそれに神さまが仰^おっしゃるんだわ。」

「そんな神さまうその神さまだい。」

「あなたの神さまうその神さまよ。」

「そうじゃないよ。」

「あなたの神さまってどんな神さまですか。」青年は笑いながら云いました。

「ぼくほんとうはよく知りません、けれどもそんなでなしにほんとうのたつた一人の神さまです。」

「ほんとうの神さまはもちろんたつた一人です。」

「ああ、そんなでなしにたつたひとりのほんとうの神さまです。」

「だからそうじゃありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんとうの神さまの前にわたくしたちとお会いになることを祈ります。」青年はつつましく両手を組みました。女の子もちょうどその通りにしました。みんなほんとうに別れが惜^おしそうでその顔いろも少し青ざめて見えました。ジョバ

ンニはあぶなく声をあげて泣き出そうとしました。

「さあもう支度はいいんですか。じきサウザンクロスですから。」

ああそのときでした。見えない天の川のずうっと川下に青や橙^{だいだい}やもうあらゆる光でちりばめられた十字架^{じゅうじか}がまるで一本の木という風に川の中から立ってかがやきその上には青じろい雲がまるい環^わになつて後光のようにかかつていたのでした。汽車の中がまるでざわざわしました。みんなあの北の十字のときのようにまっすぐに立つてお祈りをはじめました。あっちにもこっちにも子供が瓜^{うり}に飛びついたときのようなよろこびの声や何とも云いようない深いつましいいきの音ばかりきこえました。そしてだんだん十字架は窓の正面になりあの苹果^{りんご}の肉のような青じろい環の雲もゆるやかにゆるやかに繞^{めぐ}っているのが見えました。

「ハルレヤハルレヤ。」明るくたのしくみんなの声はひびきみんなはそのそらの遠くからつめたいそらの遠くからすきとおった何とも云えずさわやかなラッパの声をききました。そしてたくさんのシグナルや電燈^{あかり}の灯のなかを汽車はだんだんゆるやかになりとうとう十字架のちようどま向いに行つてすつかりとまりました。

「さあ、下りるんですよ。」青年は男の子の手をひきだんだん向うの出口の方へ歩き出しました。

「じゃさよなら。」女の子がふりかえて二人に云いました。

「さよなら。」ジョバンニはまるで泣き出したいのをこらえて怒^{おこ}つたようにぶつきり棒に云いました。女の子はいかにもつらそうに眼^めを大きくしても一度こつちをふりかえてそれからあとはもうだまつて出て行つてしまいました。汽車の中はもう半分以上も空いてしまい俄^{にわ}かにがらんとしてさびしくな

り風がいつぱいに吹き込みました。

そして見ているとみんなはつましく列を組んであの十字架の前の天の川のなぎさにひざまずいていました。そしてその見えない天の川の水をわたってひとりの神々しい白いきものの人が手をのばしてこつちへ来るのを二人は見ました。けれどもそのときはもう硝子の呼子は鳴らされ汽車はうごき出しと思ううちに銀いろの霧が川下の方からすうつと流れて来てもうそつちは何も見えなくなりました。ただたくさんのくるみの木が葉をさんさんと光らしてその霧の中に立ち黄金の円光をもった電気栗鼠が可愛い顔をその中からちらちらのぞいているだけでした。

そのときすうつと霧がはれかかりました。どこかへ行く街道らしく小さな電燈の一行についた通りがありました。それはしばらく線路に沿って進んでいました。そして二人がそのあかしの前を通って行くときはその小さな豆いろの火はちょうど挨拶でもするようにぽかっと消え二人が過ぎて行くときまた点くのでした。

ふりかえって見るとさっきの十字架はすっかり小さくなってしまひほんとうにもうそのまま胸にも吊されそうになり、さっきの女の子や青年たちがその前の白い渚にまだひざまずいているのかそれともどこか方角もわからないその天上へ行つたのかぼんやりして見分けられませんでした。

ジョバンニはああと深く息しました。

「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行こう。僕はもうあのさそりのようにほんとうにみんなの幸のためならば僕の中からだなんか百ぺん灼いてもかまわ

ない。」

「うん。僕だつてそうだ。」カムパネルラの眼にはきれいな涙がうかんでいました。

「けれどもほんとうのさいわいは一体何だろう。」ジョバンニが云いました。

「僕わからない。」カムパネルラがぼんやり云いました。

「僕たちしつかりやろうねえ。」ジョバンニが胸いっぱい新しい力が湧くようにふうと息をしながら云いました。

「あ、あすこ石炭袋だよ。その孔だよ。」カムパネルラが少しそっちを避けるようにしながら天の川のひととこを指さしました。ジョバンニはそっちを見てまるでぎくつとしてしまいました。天の川のひととこに大きなまっくらな孔がどほんとあいているのです。その底がどれほど深いかその奥に何があるかいくら眼をこすつてのぞいてもなんにも見えただ眼がしんと痛むのです。ジョバンニが云いました。

「僕もうあんな大きな暗の中だつてこわくない。きつとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行こう。」

「ああきつと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集つてるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あつあすこにいろのぼくのお母さんだよ。」カムパネルラは俄かに窓の遠くに見えるきれいな野原を指して叫びました。

ジョバンニもそっちを見ましたけれどもそこはぼんやり白くけむっているばかりどうしてもカムパネルラが云つたように思われませんでした。何とも云えずさびしい気がしてぼんやりそっちを見てい

ましたら向うの河岸に二本の電信ばしらが丁度両方から腕を組んだように赤い腕木をつらねて立っていました。

「カムパネルラ、僕たち一緒に行こうねえ。」ジョバンニが斯う云いながらふりかえって見ましたらそのいままでカムパネルラの座っていた席にもうカムパネルラの形は見えただ黒いびろうどばかりひかつていました。ジョバンニはまるで鉄砲丸のように立ちあがりました。そして誰にも聞えないように窓の外へからだを乗り出して力いっぱいはげしく胸をうって叫びそれからもう咽喉いっばい泣きだしました。もうそこらが一ぺんにまっくらになったように思いました。

ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれてねむっていたのでした。胸は何だかおかしく熱り頬にはつめたい涙がながれていました。

ジョバンニはばねのようにはね起きました。町はすっかりさっきの通りに下でたくさん灯を綴つてはいましたがその光はなんだかさっきよりは熱したという風でした。そしてたつたいま夢であるいた天の川もやっぱりさっきの通りに白くぼんやりかきまっ黒な南の地平線の上では殊にけむったようになつてその右には蠍座の赤い星がうつくしくきらめき、そらぜんたいの位置はそんなに変わっていないようでした。

ジョバンニは一さんに丘を走って下りました。まだ夕ごはんをたべないで待っているお母さんのことが胸いっばいに思いだされたのです。どんどん黒い松の林の中を通ってそれからほの白い牧場の柵をまわってさっきの入口から暗い牛舎の前へまた来ました。そこには誰かがいま帰ったらしくさつき

なかった一つの車が何かの樽を二つ乗つけて置いてありました。

「今晚は、」ジョバンニは叫びました。

「はい。」白い太いずぼんをはいた人がすぐ出て来て立ちました。

「何のご用ですか。」

「今日牛乳がぼくのところへ来なかったのですが」

「あ済みませんでした。」その人はすぐ奥へ行って一本の牛乳瓶をもつて来てジョバンニに渡しながらかまた云いました。

「ほんとうに、済みませんでした。今日はひるすぎうつかりしてこうしの柵をあけて置いたもんですから大將早速親牛のところへ行つて半分ばかり吞んでしましましてね……」その人はわらいました。

「そうですか。ではいただいて行きます。」

「ええ、どうも済みませんでした。」

「いいえ。」

ジョバンニはまだ熱い乳の瓶を両方のてのひらで包むようにもつて牧場の柵を出ました。

そしてしばらく木のある町を通つて大通りへ出てまたしばらく行きますとみちは十文字になってその右手の方、通りのはずれにさつきカムパネルラたちのあかりを流しに行った川へかかった大きな橋のやぐらが夜のそらにぼんやり立っていました。

ところがその十字になった町かどや店の前に女たちが七八人ぐらいつ集つて橋の方を見ながら何かひそひそ談はなしているのです。それから橋の上にもいろいろなあかりがいっぱいなのでした。

ジョバンニはなぜかさあつと胸が冷たくなったように思いました。そしていきなり近くの人たちへ「何かあったんですか。」と叫ぶようにききました。

「こどもが水へ落ちたんですよ。」一人が云いますとその人たちは一斉にジョバンニの方を見ました。ジョバンニはまるで夢中で橋の方へ走りました。橋の上は人でいっぱい、河が見えませんでした。白い服を着た巡査も出ていました。

ジョバンニは橋の袂から飛ぶように下の広い河原へおりました。

その河原の水際に沿ってたくさんあかりがせわしくのぼったり下ったりしていました。向う岸の暗いどてにも火が七つ八つうごいていました。そのまん中をもう烏瓜のあかりもない川が、わずかに音をたてて灰いろにしずかに流れていたのでした。

河原のいちばん下流の方へ州のようになつて出たところに人の集りがくつきりまっ黒に立っていました。ジョバンニはどんどんそっちへ走りました。するとジョバンニはいきなりさつきカムパネルラといっしょだったマルソに会いました。マルソがジョバンニに走り寄ってきました。

「ジョバンニ、カムパネルラが川へはいったよ。」

「どうして、さっ。」

「ザネリがね、舟の上から烏うりのあかりを水の流れる方へ押してやろうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこったろう。するとカムパネルラがすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押してよこした。ザネリはカトウにつかまった。けれどもあとカムパネルラが見えないんだ。」

「みんな探してるんだろう。」

「ああすぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見附みづからないんだ。ザネリはうちへ連れられてった。」

ジョバンニはみんなの居るそっちの方へ行きました。そこに学生たち町の人たちに囲まれて青じろい尖とがったあごをしたカムパネルラのお父さんが黒い服を着てまっすぐに立って右手に持った時計をじっと見つめていたのです。

みんなもじつと河を見ていました。誰も一言も物を云う人もありませんでした。ジョバンニはわくわくわくわく足がふるえました。魚をとるときのアセチレンランプがたくさんせわしく行ったり来たりして黒い川の水はちらちら小さな波をたてて流れているのが見えるのです。

下流の方は川はば一ぱい銀河が巨おおきく写ってまるで水のないそのままのそのらのように見えました。

ジョバンニはそのカムパネルラはもうあの銀河のはずれにしかないというような気がしてしかなかったのです。

けれどもみんなはまだ、どこかの波の間から、

「ぼくずいぶん泳いだぞ。」と云いながらカムパネルラが出て来るか或あるいはカムパネルラがどこかの人の知らない洲にでも着いて立っていて誰かの来るのを待っているかというような気がして仕方ないらしいでした。けれども俄にかにカムパネルラのお父さんがきつぱり云いました。

「もう駄目だめです。落ちてから四十五分たちましたから。」

ジョバンニは思わずかけよって博士の前に立って、ぼくはカムパネルラの行った方を知っています。ぼくはカムパネルラといっしょに歩いていたのでと云おうとしましたがもうのどがつまって何とも

云えませんでした。すると博士はジョバンニが挨拶に來たとても思ったのですか、しばらくしげしげジョバンニを見ていましたか

「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晚はありがとうございます。」と町ねいに云いました。

ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか。」博士は堅く時計を握ったまままたききました。

「いいえ。」ジョバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ。ぼくには一昨日大へん元気な便りがあつたんだが。今日あたりもう着くころなんだが。船が遅れたんだな。ジョバンニさん。あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね。」

そう云いながら博士はまた川下の銀河のいっばいにうつた方へじっと眼を送りました。

ジョバンニはもういろいろなことで胸がいっぱいでなんにも云えずに博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行ってお父さんの帰ることを知らせようと思うともう一目散に河原を街の方へ走りしました。



《出典》

底 本…「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年6月15日発行

1994（平成6）年6月5日13刷

底本の親本…「新修宮沢賢治全集 第十二巻」筑摩書房

1980（昭和55）年1月

入 力…中村隆生、野口英司

校 正…野口英司

1997年10月28日公開

2010年11月1日修正

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

書 名：銀河鉄道の夜
著 者：宮沢賢治
組版・装丁：あおね
挿 絵：あおね
発 行 日：令和8年7月25日
発 行：サンプル

※組版サンプルとして発刊しました内容や誤植を
見つけた場合は下記へご連絡いただければ
修正致します。

<https://gaku2702-cyber.github.io/portfolio/>

